

平成30年度島根県総合教育会議

日時：平成31年2月5日（火）

9時30分～11時

場所：県庁 301会議室

○溝口知事 それでは、平成30年度島根県総合教育会議を始めさせていただきたいと思
います。

皆様方には、お忙しい中、お出かけをいただきまして、まことにありがとうございます。
開催に当たりまして、私のほうから御挨拶を申し上げたいと思います。

本日は、皆様方には、お忙しい中、まことにありがとうございます。また、皆様方には、
日ごろから教育委員として、島根県の教育行政の推進に御尽力を賜っておりますことに厚
く御礼を申し上げる次第でございます。

平成27年度から始まったこの総合教育会議でございますが、今年度は本日が初めての
開催となります。県では、地方創生のための総合戦略において、地域を担う人づくりを掲
げておりまして、教育の質の向上は重要な施策の一つであります。島根県には豊かな自然
や古きよき文化、歴史、さまざまな産業体験の場や豊富な経験を持つ地域の方々の存在な
ど、恵まれた教育環境が、子どもたちの身近なところにあると考えております。それらを
総合的に活用しながら、学校関係者と地域が一体となって子どもたちを育むこと、そして、
学校の魅力を一層高め、島根らしい質の高い教育を進めていくことが重要であろうと思
います。

本日は、教育委員の皆様方から直接御意見等をお聞きいたしまして、今後の教育行政の
推進につなげていきたいというふうに考えております。皆様方には忌憚のない御意見を
いただきますようお願い申し上げ、冒頭の御挨拶といたします。

それでは、会議の進行についてでございますが、私が指名することになっておりますの
で、教育委員会の高橋教育監にお願いをいたしたいと思えます。よろしくお願いいたしま
す。

○教育監 知事から御指名がございましたので、私のほうで司会進行を務めさせていただ
きます。どうか活発な意見交換をよろしくお願いいたします。

本日のテーマは、先ほど知事からもお話がありましたように「島根らしい質の高い教育
をどう進めていくか」でございます。

まず初めに、新田教育長のほうから、本日のテーマの趣旨について御説明いたします。
○新田教育長 そういたしますと、お手元に資料を2枚お配りしております。1枚が横長のペーパー、もう一つが縦長でございます。

まず、横長のほうをごらんいただければというふうに思います。本日のテーマの背景にもなりますけれども、まず、国による学習指導要領の大きな動きと、それから、島根県内での特徴的な動き、この2つの面での状況を簡単に御説明します。

まず、横長のペーパーでございますが、学習指導要領の改訂が迫っております。小学校においては2020年度から全面実施、そして中学校、高校と順次、年次計画で改訂後の学習指導要領が実施されることとなります。特に小学校では、今年1年が準備期間、来年の4月から新学習指導要領という、いわば今年が準備に向けた仕上げの年という位置づけになろうかと思っております。

この資料の上のほうに、学習指導要領改訂の方向性として、新しい時代に必要となる資質・能力の育成として、マーカーをつけておりますが、3つの柱が示されております。まず、左側にあります、生きて働く「知識・技能」の習得。何を理解をしているのか、何ができるのか。いわば、従来から言われている学力あるいは知識というところに相当する分野だと考えております。それから、その右でございます。2つ目の柱は、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成と。いわば、理解していること、できることをどうやって使っていくかというふうな能力であります。予想したり仮説を立てる、あるいは解決の方向を発想するなどの力がこういった分野であろうと思っております。3つ目が、その上に位置していますが、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養。どのように社会や世界にかかわり、よりよい人生を送っていくかというふうな分野でございます。こうした力を育むために、右下、マーカーつけておりますが、学校では子どもたちが「主体的・対話的で深い学び」を実現できるよう、授業改善などに取り組んでいく必要がございます。

また、新しい学習指導要領の特徴の2つ目としては、資料のちょうど真ん中に、何ができるようになるかという枠の中にあります「社会に開かれた教育課程」の実現、これが非常に大きな特徴であろうというふうに考えております。よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を、学校と社会が共有しながら地域社会や働く人への理解を深めるといったことも含めまして、連携・協働して実現しようとしている点であります。

社会に開かれた教育課程で申し上げますと、例えば地域のさまざまな資源を活用したり、

社会教育との連携を図りながら、地域社会や働くことへの理解を深めるといったような教育も考えられると思います。こうした新しい学習指導要領の方向性は、島根県が現在、力を入れて進めております、例えばふるさと教育であったり、学校と地域が連携・協働して子どもたちを育もうとする取り組み、こういったものと非常に重なる部分が多いというふうに考えております。

次に、もう1枚の縦長の、第2期しまね教育ビジョン21の全体構造の資料をお願いいたします。資料の左端に、島根県の教育の進め方の基本理念として、マーカーをしております、「島根を愛し 世界を志す 心豊かな人づくり」、これを掲げております。急速に変化する時代の中で、先を見通すことが困難な時代、これからの時代を子どもたちが生きていく上で、島根あるいは身近な地域など、ふるさとの自然、文化、歴史、伝統などに対する愛着や誇り、理解、こういったことを土台に据えることが大切であろうと考えております。そして、そうした土台の上で、日本や世界を見渡す視野を持って、夢や希望に向かって進むと。そういった方向とともに、社会に能動的にかかわる態度、あるいは貢献する心を持つということも大切であろうと考えております。他人を思いやる心や美しいものに感動する心、生命を尊重するなど、豊かな心を身につけてほしいという考えをあらわした目標というふうに考えております。

資料の左下のほうにマーカー1カ所つけておりますが、県の教育委員会としましては、これまでもこうした基本理念の考え方を、学校だけでなく家庭や地域とも共有し、連携・協働して、島根の子どもたちの未来を切り開くための力、こういったものを育むための取り組みを推進してまいりました。新しい学習指導要領で述べましたように、島根の豊かな自然や歴史、あるいは伝統・文化、人と人とのつながりの深さといったものを活用しながら、ふるさとのよさや愛着を喚起するような取り組みにもつなげていきたいというふうに考えております。

本日は、こういった、みずからの人生と地域や社会の未来を切り開くために必要となる生きる力を子どもたちに育むために、どのような取り組みが必要なのかといった視点で、知事と教育委員の皆様で議論をしていただき、今後の教育行政の推進の参考にさせていただきたいと考えております。よろしく願いいたします。

○教育監 説明ありがとうございました。

それでは、早速ですが、知事との意見交換に入らせていただきます。

私のほうから順次指名させていただきますので、それぞれの委員の方から御発言をよろ

しくお願いいたします。

では、最初に、藤田委員、よろしくお願いいたします。

○藤田委員 おはようございます。それでは、私、隠岐から選出されております藤田と申します。

冒頭、ちょっと申しわけありません、少しこのこととは関係ありませんが、私自身が今、自然災害ですね、いろんなことが起きている中で、私たちが隠岐で、地域で行っている活動ですけれども、婦人会としまして、昨年から防災頭巾を新1年生に110から120の数をつくりまして、防災の活動に、練習ですとかそういったことに役立てていただこうと、全児童に届くように6年計画で今、2年が達成されております。こういった、地域の力をもって子どもたちに何かができないかということに、少しずつかわらせていただいております。

そして、子どもたちへの想いですけれども、この教育ビジョンをつくる時に少しかかわらせていただいたせいですか、私はこの基本理念の「島根を愛し 世界を志す 心豊かな人づくり」、ここまで来るのに本当に本当に議論を重ねながら、こういった基本理念を掲げました。

私は、子どもたちが自分たちの環境、地域のよさ、周りにはたくさんの伝統・文化、大人の知恵があります。そういった地域のよさを知り、誇りと自信を持って社会に向けて語れるように、そんな子どもたちを育てていてもらいたいというのが一番の思いです。

自分の生まれ育ったところ、自分の地域のよさを自分の口で語れるということは、非常に子どもたちにとって自信にもつながってくると思いますし、愛着も湧きます。そして、人への、地域の方々とのコミュニケーション能力も養われていくのではないかなというふうに考えております。そして、その傍らには、教員の皆さんが本当に子どもたちに目を注いだ力を携えております。教員の皆さんのやる気をそぐことのないように、保護者、地域が一体となって、教員の皆さんの力を本当におかりしながら、子どもたちを育てていていただきたいという思いでおります。

私の聞いたところでは、小学校の先生、女性の先生ですけれども、一旦授業に入りますとトイレにも行けない。トイレに行くことすら忘れるほど、子どもたちのために40分間勉強し5分間の休憩時間、その間に片づけ、準備、そして次の授業にかかるというような状態が続きます。子どもたちに目を届かせながら、そういった準備を重ね、授業を行っていく上で、気づいたら終了時まで、学校が終わるまでトイレに行っていないということに

気づく、何人かの先生がそういうふうには。それが苦とは思っていらっしやらないんですね。苦とは思ってはいらっしやらないんですけど、それが果たして先生方の健康管理にはどうなのかなというふうな、当たり前のようにそういったことになっておりますけども、でも、そういった先生方のやっぱり体調管理も必要なのではと思っております。

教育の質の向上を進めていくには、やはり働き方改革の両立を図っていく必要があると思います。そうした先生方の職務を少しでも軽減するためには、小学校でいうならば、専門性のある、担任の先生が少し子どものことに目が届くように、体育だとか、音楽だとか、図工だとか、そんな専門性を持った先生方を配備しながら、少しでも先生方がまとまった時間にそれぞれの子どもたちのことが、その日の授業のことがまとまれるような形になるといいのかなと、教員の加配が必要ではないのかというふうに思います。

これらのことを達成するためには、やはり何といたっても子どもたちへの教育の予算がかかります。そういったところの充実を図っていただけたらなというふうに思います。これは別に小学校だけではなく、これから始まっていく小学校、中学校、高校と、さまざまな問題が出てくると思います。働き方改革の中にはそういった二面性を持っておりますので、ぜひこういうところに目を向けていただければなというふうに思います。

教育質の向上は、やはり教員が子どもたちに目の行き届くものであってほしいと。そういった子どもたちを育ててほしいと思っております。どうぞよろしく願いをいたします。

○教育監 ありがとうございます。

先ほど自分の育った地域に誇りを持って、ちゃんと語れる、そういう子どもたちを育てるといふものだ。そのためにはというような話ありましたけれども、知事、いかがでしょうか。

○溝口知事 そうですね、子どもたちが活動する世界というのは、その周辺の人たちでありましてね。また、そういう話を聞くためには、経験のある方々と同時に、子育てもしておる御両親とか、若い方が多いかもしれませんね。その両方をいろいろな機会に子どもたちに教えたり、あるいは話をしたり、そういうことが大事だろうというふうに思います。

私も必ずしも現地へ行っておりませんので、子どもたちのお話なんか聞きながら考えるわけですが、昔よりもいろいろな形で情報が入りますから、ダイレクトに先生とか、あるいは両親だとか、近所でなくて、テレビだとかなんとかという力も非常に強いわけですが、また、そういう映像の世界は教育と若干ずれるところがございます

から、そこら辺の考え方などをどういうふうに教えていくのか、そういうことが必要、大事ではないかというふうに思う次第でございます。

○教育監 ありがとうございます。

続きまして、浦野委員、お願いいたします。

○浦野委員 浦野と申します。出雲市に住んでおります。大学生と中学生の子どもがいるんですけども、中学生の子どもは今年2年生で、多分このままいくと、18歳成人の第1号になるのではないかと思います、その年なんです、選挙権年齢の引き下げだと成人年齢の引き下げで若い力が必要とされている現代において、子どもたちが社会人として生きる力、社会人の資質を学校教育で身につけさせることも今求められている、重要だと思います。ほとんどの子どもさんが在学中に18歳を迎えることとなりますので、社会の中の一員であるという意識を教育の中で高めさせていくというのが、やはり一つ、大事なポイントになるのではないかと思います。

全国的にも、こういうところを踏まえて、いろんな教育活動が展開されていると思うんですけども、幸いなことに島根県は、先ほど教育長さんからの御説明ありましたけれども、かねてから、学校と地域が連携・協働しながら、教育の魅力化に取り組んでまいりました。地域の人々とのかかわりや、さまざまな経験をともにすることによって、双方の活性化、学校と地域の活性化、それと地域の魅力の再発見があったりとか、ほかにも地域の課題に積極的に子どもがかかわったりだとか、さらには自分の将来を周りにいる大人たちを見て真剣に考えるようになったりとか、そういうことが、教育の魅力化の中で、地域とかがかわる教育活動を通して、子どもたちについてきていると思うんですね。

この1年、私、教育委員になって2年になるんですけども、この2年間の間に中山間地域の高校を何校か視察させていただいたときに、子どもたちに直接お話をすることができました。その中で、そういう力がついているなというのを直接感じ取ることができました。社会人として生きる力を学ぶ場というのを、いかにして学校教育の中に取り入れていくかということが、やはり教育の質を向上させることとつながっていくのではないかなというふうに私は考えております。

今、島根県が行っている教育の魅力化を、離島、中山間地域のみならず、松江市や出雲市なども含めた、島根県全域に広げていくということに、私は大きな期待をしております。そこでやっぱり育まれた力というのは、新しい学習指導要領の中で目指す方向性と、ちょうど相まっていっているのではないかと思います。それで、やっぱりそういう力を子

どもたちにつけさせるための教育を学校でもやっていけたらなと思います。

○教育監 ありがとうございます。

新たな視点で、成人年齢の引き下げという観点から、学校教育の中にそういう社会の一員であるという、そういう力を、自覚を身につけさせるということを取り入れていくか。そのために、地域と協力ですか、そういった分析が出てきましたけど、成人年齢の引き下げというのはもう間もなくやってくるんですけども、いかがでしょう、そういうことと関連して。

○溝口知事 あれですか、御両親は、自分の子どもさんが学校行ったりしますから、そこでいろんな情報を身につけるといふふうになりましようが、多くの人は、必ずしも子どもさんが自分の家庭にいて、いろんな話をするということがそうない人もたくさんいるのではないかと。最近、子どもの数が昔より少ないでしょうから、そういう方々に対してはどういうことが、何ですかね、関与する、あるいは子どもたちと話をすることにどうしたらつながっていくのかというのは、どんなもんですか。

○教育監 いかがですか。どなたでも。

○溝口知事 御自分の御両親だとか、それはしょっちゅう会っているわけです。あるいは、そうでない人の場合には、どういう形で子どもたちと接触をして、あるいは子どもたちの知らない人からいろんな話を聞いたりするということがうまく回っているかどうかということは大変な一つの点じゃないかと思えますけど、親子となるとなかなか、いろんなやり方もあり、しょっちゅう会ってますから、そうじゃない人、近所の人たちとの話、かかわり合い、そういうものをどういうふうに広げていくかですね。子どもたちのやっぱり視野が広がるためには、知らない人たちとも話が聞けるとか、あるいは学年がちょっと上の人とか、そのような点はどうですかね。

私どもの若いころ、小さいころは、子どもたちが余り勉強もしなかったというわけですから、いろいろ遊んだりね、そこでけんかをしたり、そういうことで自分のいろんなことについて学ぶといいますか、こういうことをしたら人から嫌われるとか、こういうことをしなきゃいかんとか、自然に学ぶ場があるわけですけども、そういう点を教育のほうからはどういうことができるのかと。なかなか難しいですよ。

○教育監 具体的にいろんな取り組みは行われていると思うんですけど、ふるさと教育、キャリア教育、学校の視察も行かれた方は多いと思うんですが、どうでしょうか、具体的に大人が子どもに対してそういう、さっきおっしゃったような形でかかわっていくと言わ

れた、御紹介していただいて。

○出雲委員 先日、吉賀高校視察に行ったとき学校の中に東京の大学院を休学してコーディネーターとして働いている方がおられました。その方が言われたのは、自分は受験を経験し、浪人生活も経験しています、生徒とも年齢も近く進学、大学に関する相談とか大学生活はどんなのかなどいろいろな話ができるという事でした。外部から来られた方と学校の中で話ができることがいいと思います。

○教育監 学校以外のところ、大人たちがどういうふうに学校に、あるいは子どもたちにかかわっていくのかっていうのは、これはこれで一ついろいろ話をお伺いしたいテーマだと思うんですけど、ちょっとこれ、また後ほどということにして、出雲委員、御発言いただきましたが、改めて、出雲委員のほうからよろしくお願いします。

○出雲委員 益田市から参りました出雲と申します。よろしく願いいたします。

島根県は東西に長く、離島もあり歴史、文化、風土など、それぞれの地域で特色があります。地域の子どもたちをどんなふうに育てたいかというのは、地域の思いであったり保護者の思いであったり学校現場の思いもあります。その思いをお互いに共有しながら子どもたちを育てていくことが大事だと思います。

先ほどお話がありました、しまね教育ビジョンの理念である「島根を愛し 世界を志す 心豊かな人づくり」、これはただ単に学校だけ、家庭だけではなく地域、外部の方々も含めた中で育まれていくものではないかなと思います。

今、益田市では「人づくり」に力を入れております。私が住んでいる地域では、平成27年に小学校がコミュニティースクールに指定されたこともあり、公民館やPTA、地域の方々、コーディネーターの方々が学校運営に加わり地域と連携・協働しながら子どもたちを育てていこうと取り組んでいます。また、小学生だけではなく地域の保育園児、中学生、高校生も含めて子どもたちが主役になれる場づくりを進めていっております。

昨年のOECD/japanセミナーにおいて「学校と地域の連携・協働がカリキュラムマネジメントに寄与した事例」として紹介されました。子どもたちは多くの大人とかかわる中で多くのことを学びます。それは人とかかわり方であったり、相手に対する思いやりであったり、またそのかかわりの中で将来の目標や夢を見つけることもあります。

ある高校生のお話を少しさせてください。小学校のころから人見知りで皆ともなかなかなじめない、一人でいるほうが好きな生徒でした。でも絵を描くことや、ものづくりがとても上手でした。中学生になって地元の中高生ボランティアグループにお母さんに勧めら

れて渋々参加してきました。そのグループの中で地域の方々や外部の大人の方々と接する中で高校2年生になるころには、多くの人の前で自分たちの事を発表し、自分の言葉で考えを伝え中学生にも指導する姿も見られました。明らかに変化が見え、一番驚かれたのはお母さんでした。先日その生徒と話す機会がありました。地域でいろんな活動をたくさんの方々と取り組む中で、自分に自信がつき、将来の目標も見つけられたと話してくれました。また、その生徒にかかわった大人の方からも、子どもから学ぶことがあった、元気ももらったとお話を聞きました。子育て世代を終えられた地域の方々とは子どもと接する機会もなかなかなく、今の子どもたちがどういう状況にあるのか、どんなことを考えているのか、学校の様子などがすごくよくわかったとも言われてました。

こういう活動を通して、学校と地域が連携・協働して地域ぐるみで子どもたちを育てていくことの大切さを改めて感じたところです。このような取り組みも、島根らしい質の高い教育の一つではないかと思います。社会に開かれた教育課程や主体的で対話的な深い学びにつながる地域協働スクールを多くの地域に推進していただきたいと思っております。

○溝口知事 なるほど。

○教育監 地域ぐるみの小中高一貫教育というような感じの事例を先ほど御紹介いただきましたけど、いかがでしょうか、この島根。なかなか都会ではできないことというのがありますけども。

○溝口知事 小・中・高だね。

○教育監 ずっと育てられたわけですね、子どもたちを。

○出雲委員 そうですね。地域の方々は子どもたちの成長をずっと見てきました。

○溝口知事 そうですか。僕らの時代はあんまり見ていないから。生きる気力がなくなってくる感じがしますね。大人たちは子どもたちに勝手に遊んでくれば良いというような感じでしたけども、やっぱり勉強にもかなりプレッシャーをかけてるわけでしょう、子どもに対しては、学校の。

○出雲委員 そうですね。勉強という点でも地域の活動の中に寺子屋という活動をやっております。例えば土曜日や長期休暇にいろんな人がかかわって子たちの学習支援などをしております。子どもの人数が急激に減っているということもあり、子どもは地域の宝だという思いが地域の方々にはあると思います。

○溝口知事 なるほど。

○出雲委員 昔は子どもの人数も多かったですから。

○溝口知事 いっぱいいたんですよ。

○出雲委員 そうです。いろんな学年の子どもたちで川や山に遊びに行くというようなことができたのですが、子どもの人数も少なくなり、つながりやかかわりがだんだんと薄れていっています。そのようなつながりをなくさない為に地域の方々と一緒に子どもを育てていく取り組みをしております。

○教育監 ありがとうございます。

それでは、続いて、真田委員のほうからお願いいたします。

○真田委員 それじゃあ、失礼します。溝口知事には、宍道高校を新設するときに大変お世話になりまして、どうもありがとうございます。

○溝口知事 そのときに来たの。

○真田委員 はい。ちょうどこの階のずっと一番奥のほうでお話しいただいたときに、立派な社会人を育成してくださいと、税金をしっかりと納めるような人材をつくりなさいというのを言われて。おかげさまで10年たちまして、それでもう少しずつ落ちついて、多くの卒業生が地域で頑張ってくれています。

そのときに一番感じたのが、地域に学校を開くということで、高校はどうも敷居が高いみたいでして、小中学校と違って。敷居をできるだけ低くするというので、遠足は地域の青パト隊の方に先導していただいたり、いろいろ協力していただいて、瑞風のこともあるんですけども、いろいろ地域の方々にやっていただいています。というようなことで、生徒達も少しずつ地域に慣れてきたなという感じがしています。

教育関係の者として、教育委員にならさせていただきましたので、今回はそういうことも含めて、知事にお話ししたいなと思って今日は来ました。

1つは、オール島根でやっぱり取り組むんだろうなということです。家庭教育、それから学校教育、社会教育、これは、今言われているのが1次、2次、3次教育だと。1次教育が家庭教育で、2次教育が学校教育で、3次教育が社会教育だと。それ全部合わせて6次教育でやらないと今はもう教育として成り立っていかないんじゃないかということをおっしゃっています。ただ、島根は、高齢者の方々が学校教育に協力していただくことについては随分、やっていただいているというふうには思っています。ただ、それが全てボランティア活動ですので、これが大変になってきているということをいろんなところで聞いていきます。

それから問題なのが、1次教育としての家庭教育の力が少しずつ落ちてきて、そのしわ

寄せという言葉が悪いんですけども、それが全部学校のほうに、お願いね、お願いねということで、どんどんどんどん足し算できてるといことです。

新しい学習指導要領でもそうですけども、道徳の教科化もそうですし、それからパソコンの教育もそうですし、外国語活動もそうですし、どんどんどんどんいろいろ積み重なってくる、引き算がないというところで、それにあわせていろんなものが来ているということが、非常に現場としては多忙だなと感じている人が多いなというふうに。ただ、それを少しでも協力的にやっていただく高齢者の方もたくさんおられますけども、ボランティア活動ですので、どうしても、無理があるというところです。

○溝口知事 そうですよ。

○真田委員 なかなか、その辺で協力していただける方ばかりではないので。

○溝口知事 やっぱりなかなかできないです。

○真田委員 そうです。

○溝口知事 皆さん、そうかもしれませんね。

○真田委員 だから、そこら辺が一つ問題だろうなということ。

それからもう一つは、先ほど言われましたけど、ふるさと教育とか、それからふるまい向上ということについては、定着しつつあると思います。平成17年度からふるさと教育は多分始まったんじゃないかなと思いますけど、だんだん定着してきて、魅力化も含めて、コーディネーターというのを入れていただいたことによって随分活性化してきてるんじゃないかなと、その中でいい施策をしてもらってるなというふうに思っております。

今、専門高校が、僕はどっちかいうと専門高校とか定時制とか特別支援学校を中心に異動させていただいたのでよくわかるんですけども、やっぱり地域の中で、特に専門高校の場合は、地域の中間的な管理職とか、地域の中心となって動かしているというところで、人材を島根県へ供給してる大事な一つのものじゃないかなというふうには思っています。普通高校ももちろんあるんですけども、先ほど島根を愛して世界を志すということがありましたけども、どちらにしても、進学して外に出るにしても、やっぱり地元、地域のことをしっかり知って、県外からでも応援していただけるような方を育てないけませんし、もちろん地域の中で頑張るとい方を育てていかなきゃいけないということで、専門高校とか、それからそういう専門的な知識を持った方の活用をこれから少しずつ考えていかなきゃいけないんじゃないかなというふうに思っております。

先ほどありましたけど、地域との連携の中で一つ、公民館というのが社会教育の中では

大切なんじゃないかなと。このごろ、地域というか、古志原なんですけど、その辺におりますと、それをすごく感じて、子どもたちを集めて活動されたり、高校生が来ていろんなことをやったりとかいうようなことをやっていますので、核として公民館が一つ、学校ももちろんですけども、社会教育として公民館という立場が非常に重要になってくるんだなという気がしています。

一つは、オール島根で取り組むことが島根らしい教育だろうと思っていて、そのためには高齢者の方に御活躍いただくということが一つ。

○溝口知事 なるほど。

○真田委員 それから、島根を愛して世界を志すというふうに理念でうたっていますので、県外に出るにしても何にしても、地元を愛する、地元地域に貢献するというか、貢献するような人づくりを学校として行っていくこと。この2点が、これからの島根県の教育が目指す方向じゃないかなというふうに私は考えています。

○溝口知事 そうですね。

○教育監 ありがとうございます。話題が多岐にわたりましたが。

○真田委員 済みません。

○教育監 何かお気づきの点があればお願いいたします。

○溝口知事 あれですね、昔はおうちの中で、お父さんは働きに出るけども、お母様はうちでいてやってる感じですけど、今は御両親とも仕事なんかで出られることが昔よりは多くなってるんですね。そうすると、家庭だけで子どもたちを見るわけにはいかないから、その地域でやられているのは、見てあげるといいますか、そういうことが必要なんだろうと思うんですけども、そのやり方は地域地域によって違うでしょうし、状況によっても違うんだろうと思いますが、そこはやむを得ない感じがいたしますが、そういう意味で、地域でその地域全体の子どもたちのことを、高齢の、時間的に余裕のある方々が見てあげるというか、そういうような仕組みはあるわけでしょうから。

○真田委員 ありますあります。

○溝口知事 ありがとうございます。何かそういうものをうまく活用していくということは大事なことだろうと思いますね。そういう点は、教育委員会なんかそういうことについて御指導したりすることが、あるいはいろいろ勉強してもらおうとか。

○教育監 そうですね、社会教育課あたりが、そういう地区、地域にかかわるということではございます。

○溝口知事　そうですね。そういうメカニズムがうまくワークしていくというふうに教育委員会もやっておられるんですが、やっていく必要があるならという感じはいたしません。

○教育監　では、最後になって、大変お待たせいたしました。

林委員、よろしくお願いいたします。

○林委員　失礼いたします。邑智郡美郷町から参りました林と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私、今、小学生、中学生、高校生と子どもが3人おまして、小・中学生は地元の美郷町の小・中学校、また、長女は隣の川本町の島根中央高校に通っております。

今、私が教育というか、学校の中で期待をしているのは、県立高校が今やっとなタブレットですとか電子黒板といったICTを使った教育のほうを、島根県の中でも導入が始まったばかりなんですけれども、これがさらに拡大していけばいいなというふうに考えております。

なかなか先生もお忙しい中で、今度はタブレットを使った授業、電子黒板を使った授業という、ちょっとそのものありきのような授業になってしまうと、これは非常に負担がかかるものではあるんですけれども、一人一人に、今、美郷町では中学校は生徒全員にタブレットが渡されていて、今、小学校でも、小学2年生までは1人1台持っていて、来年からは小学校1年生にも行き渡るようにタブレットを導入されているんですけれども、実際には、今まで問題があって、黒板に書いて、じゃあちょっと計算して、じゃあ発表してみようというのがあるんですけれども、もちろんそれはそれで自分の思いを発表する、発言をするという表現の力は大事なんですけれども、瞬時に全員が、じゃあ答えをぽんと出せば、この答え、その答え、例えばA、B、C、Dなら、全員の分がすぐに出るわけです。その中で、じゃあ何でこうなるんだろうということをまた先生が進めていくこともできますし、そういう授業を進めていくと、この子はどういうところが苦手なのかということが先生にも理解できてくると思うんです。そういうことで、限られた一つの授業の中で、先生方もさらに濃い授業ができてあたりとか、弱いところというのが判断できるんじゃないかなという気がしています。

また、2020年度から学習指導要領が順次変わっていくんですけれども、その中でも小学校からはプログラミングが授業の中に取り込まれるようになります。その中で、プログラミングをすることが重要というわけではなくて、むしろ物事には道理があると。その

道理に進めていけばうまくいくのであるとか、物事が解決するんであるというような論理的な思考を植えつけるには非常に高い道具になるんじゃないかなというふうに思っています。

また、というか、地元の学校のことを言って恐縮なんですけれども、今、町内にもう一つの小学校があるんですが、今、この間、今度新しく小学校に入る新入生のために5年生が学校紹介をしようということで、どういうことをやったかといいますと、今、ペッパーというロボット型の、何ていうんですか、人間ロボットみたいな形のものが各校にあるんですけれども、それを使って、学校の行事であるとか、あと授業の写真を撮って、ペッパーのここに画面があるんですけど、それを見せながら、ペッパーにどういうことを、4月はこういうことをやります、こういうことをやりますという読ます原稿を5年生がプログラミングをさせるってというようなことを授業公開のほうでやっておられたそうです。ちょっと僕は行けなかったんですけど。そういうことで、子どもたち同士で、子どもが、今度の1年生が関心をつくるためにはどうすればいいとか、保育園から小学校に入る子どもにどうやってわかりやすくやるかということ、各班がグループになって、話し合いながらプログラミングをするというようなことを今しています。

また、先ほど知事のお話の中で、知らない人との交流であるとか、学びの中から子どもたちの視野が広がるというお話ありましたけれども、各学校で英語授業、外国語授業の助手の外国人の方がいらっしゃるんですけれども、そちらの家族の方と電子黒板をつないでテレビ電話をして、その助手の方が通訳をしていただくことになるんですけれども、日本ではこんな、日本の学校ではこんなことをしていますとか、アメリカではうちの子はこういうことをしていましたというような形で、非常に、うちのほうで余り外国人の方とお話しする機会ないんですけども、子どもたちがそういうALT以外の方、家族の方ではありますけれども、いろんなそういう方と話すことを通じて、また文化であるとか習慣の違いというのを、じかに話しながら学べるというのは非常にいいことじゃないかなと思っていて、活用の仕方にまだまだすごい大きな可能性があるなというふうに思っています。

もう1点なんですけれども、先ほどのしまね教育ビジョンの中にも、島根の教育目標を達成するための基盤ということで、家庭と地域と連携した学校教育の展開というところでマーカー引いてありますが、先ほど真田委員のほうからでも家庭教育の力が落ちているというお話ありましたが、確かに、改めて家庭の役割というのが非常に重要だなというのを、私は子どもを持ちながらひしひしと感じております。こうやって今、ふるさと教育である

とか、地域の方々に支えていただきながら、行事であったりとか作業をしていく上での感謝の気持ちでありますとか、あとは生活習慣、また、やはり家庭学習というものは、やはり家での非常に大事な役割でもありますし、本年度の全国学力テストのときの家庭の実態調査のときにも出てたんですけれども、やはり家庭学習の時間が少ないと。中学校3年生でも、授業以外で1時間以上勉強している割合という、全国と比較しても非常に少ないというところがありまして、これは親の責任といいますか、家庭の中でやはりしっかりと教えていかなければ、指導していかなきゃならないなというのを非常につくづく感じているところでもあります。以上です。

○教育監 ありがとうございます。

○溝口知事 お母さんが働かれる方が多くなって。

○林委員 そうですね、やはり共働き。

○溝口知事 子どものあれを見ることができないということがありますよね。

○林委員 はい。そうすると、やはり子どもが、自分がやる気があればいいんですけれども、どうしてもわからないところがあるとかっていうと、ちょっとそのままになってしまったりであるとか、なかなか難しいところが出てくると思います。

○溝口知事 ずっと昔は、女性の方が会社で働くっていうのはそうたくさんなかったわけなんですけども、今はより増えているわけですよね。それから、女性のそういう会社なり社会の地位っていいですか、高くなっておられますから、その関係を子どもとの関係でどういうふうにしていくのかという。御両親がいなくて、子どもがうちへ帰っても誰もいないっていうんじゃないかなあれですし、あるいは難しい課題があるような気がしますけれども、そういう場合にはどういうあれをしておられるわけですか、地域として。

○林委員 地域の中ではですけども、小学校に関しては、放課後児童クラブですか、のほう小学校と隣の施設に併設してありまして。

○溝口知事 そこには先生がおられるわけですか。

○林委員 いえ、先生ではなくて、地域のボランティアの方ですね。

○溝口知事 地域の方がやっておられるわけですか。

○林委員 はい。遊ぶものもあるんですけど、まずは最初に宿題をさせて、見てあげるといって、まずは宿題をしてから遊びましょうというような習慣づけをしていただいたりしてもらっています。

○藤田委員 1年生から3年生までは学童保育があったり。

○林委員 そうですね。

○教育監 学校だけでは対応できないことがたくさんありますんで、そういう活動も地域の方にお手伝いいただいているという意味で、たくさんございます。

○溝口知事 なるほど。

○教育監 一応、一通り御発言をいただきましたけれども、まだまだたくさんお話しにしたいところあるかと思えます。

皆さんからのお話の中に、ちょっと共通して何人かの方から御指摘があったのが、例えば藤田委員のほうからは、地域に自信と誇りを持つような、そういう教育をといたときに、ただ、先生方がちょっと忙し過ぎてという話も出ましたし、それから、真田委員のほうからは、家庭教育、さっきから話題になっていますけれども、ちょっと家庭教育に問題があって、そのしわ寄せが学校に行ってるとか、藤田委員のほうから働き方改革というキーワードも出てまいりましたけれども、質の高い教育をやるためにどんどんどんどん内容を増やすだけでは、教員は数限りもありますし、これを、質の高い教育をやるということと働き方改革というのをどういうふうに両立させていけばいいのか。これについて何か、もうちょっと掘り下げてみたいと思えますけど。

○藤田委員 先ほども少し申し上げましたけども、勤務内容増の中で学力の向上と働き方改革の両立を図るには、やはり教員の加配が必要ではないのかなというふうに思います。

先ほど小学校の先生のことを例に挙げて少しお話をさせていただきましたが、それぞれ教員の皆さん、一生懸命に子どもたちのために頑張っておられます。それぞれ教員の皆さんの働き方、資質、いろいろありますけども、子ども、中心はやっぱり子どもたちのためにという思いで一生懸命に頑張っておられて、それが、例えば時間外的に学校に残る時間が多いとか少ないとかっていうふうなことも叫ばれていますけども、やはりそれぞれの先生方のやり方があったり、その思いがあったりすることであって、それが先生方の苦にはなっていないと思っているんです。子どもたちに対する思いのほうが強いのと思うんですけども、そういった思いを反対に、働き方改革を進めるがゆえに、ただ時間が過ぎて、先生方が少し楽をするとか、そういったふうな形の見方になっていっては、それは先生方に対して本当に申しわけないなど。先生方は一生懸命で、どういうふうにしてこれをやっていこうかという思いの中での働き方改革でありますので、保護者、地域の皆さんに周知するときに、先生方の思いが、ただ自分は休みたいとか、少し手を抜きたいとかっていう思いではない。そういう思いではなくということが伝わるような推し進め方をさせていただいたら

などというふうに思います。

それを達成するにはやはり人材確保で、ある種、加配をしていかなければ、例えば事務的な内容なことは事務的な方がアシスタント的につくとか、それぞれ専門性のある先生方がつくとか、そういった加配がやっぱり先生方の健康管理にもつながっていくということだと思いますので、そういった考え方を進めていく必要があるのではないかなというふうに、そして何度もいいますがいかに周りの方々に先生の思いが伝わっていくかということが一番重要じゃないかなというふうに考えます。

○溝口知事 わかりました。

○教育監 県としてもいいですか、知事のほうからも国に対しては、教員を配する充実ということはもう毎年するんですけど。

○藤田委員 済みません。

○教育監 なかなか応えてもらえないというのものもある。

先ほどの業務のアシスタントというのは、実は今年度から高等学校のほうへ導入しまして、これ、各学校から非常にありがたがられているという実態ありますけども、人を増やすだけではなかなか。

○藤田委員 難しいですね。

○教育監 人を増やす以外の何かこういうことはっていうのはありますか。

○真田委員 新しい学習指導要領を示されて、新しいことで、アクティブ・ラーニングとか、社会に開かれた教育課程なんてことを言いますが、優秀な人材をいかに集めていくかということが、これから教員の、何ていうか、島根らしい教育の質の向上には不可欠だろうと。そのためには、その入り口のところをきちんとしていかないといけないんじゃないか。ただ、島根県でも大学訪問に行かれたりとか、それから各地で説明会開かれたりとか、ふるさと定住財団と連携しながらいろいろやられたりやっておられるんですけど、どうしても採用試験の倍率が下がってきているということが実態じゃないかなと思います。それは、一つには、ああやって報道で言われるブラック企業じゃないかとか、ブラックの仕事じゃないかとか、それから、民間企業が景気がいいからというようなことがあると思うんですけど、そこで何とか大学と連携して、教師塾とか、大学の教育学部系のところで教員になれる方を育てていくとか、それから、医療系でやっておられるけど、奨学金を考えて設立するとか、何か手を打って、優秀な人材の確保ということが必要なんじゃないかなと。これは、働き方改革とあわせて、優秀な人材を確保するということが大事じゃな

いかなと思っています。

ただ、多忙というのと多忙感というのは違いますので、教員という仕事は子どもと一緒に何かをやっていくというところに喜びがあるので、そういうところも含めて、多くの方を確保するということが必要なんじゃないかなというふうに考えています。

○教育監 教員を確保すると同時に、質もあってほしいという話ですけど。

○溝口知事 今の子どもたちと先生との関係というのはどういう感じなんですか。圧倒的に先生たちがいろいろ指揮するっていうのが割合が大きいんですかね。

○教育監 それは大分薄れてきてるっていうか。

○溝口知事 薄れてきてるんですか。

○教育監 一緒といいますか、もう上から教え込むという形ではなくて、先ほどこちらでありましたけども、主体的・対話的で深い学び、先生自身はその活動をしていって動いていくと考えていて、レクチャーだけで教え込むというやり方ではなかなかついてこなくなっているというふうな実態はございます。

○溝口知事 そうですか。

○教育監 それをやると教員の手間がまた増えるという、しゃべってるだけだったらまだ楽ですけども。先ほどありましたように、教員採用試験の倍率というのも、実はこのところ、かなり下がってはきている。他県に比べたらまだ一定の水準はありますけども、県挙げて人材を確保というようなことですけども、医師の確保なんていうもよく言われていますけれども。

○浦野委員 ちょっと先ほど出ておりましたコーディネーターさんという職業といいますか、今、職業として成り立っているのかどうか、ちょっと微妙なところなんですけれども、先ほども申しましたけれども、視察させていただいたときに、コーディネーターさんっていう方を、私、初めてお会いしたんですよね。今まで話には聞いていたんですけれども、なかなかイメージできなくて、実際にお会いしたら、あっ、こういうことをしてくださる方なんだというか、こういう人なんだって。やっぱり実際お会いすると、その人のお人柄とか、子どもたちがどれだけその方のことを信頼してついていっているかというのを肌で感じるんですよね。だから、この仕事がきちんとした職業として成り立っていくと、また学校教育にもよい影響を及ぼすし、働き方改革という面でも、すごく有効ではないかなと思うんですね。

○溝口知事 その人たちは先生の補助役をしてるということですか。

○浦野委員 先生の補助というよりは。

○教育監 コーディネーターがいた学校の校長してたのが何人かおるんですけど、ちょっとコーディネーターの実態とか、やっぱり何か。

常松課長、ちょっと説明してください。

○常松教育指導課長 教育指導課の常松です。

コーディネーターというのは、我々よく斜めの関係という言い方をしてますけれども、教員と生徒は縦の関係、生徒同士は横の関係だとすると、コーディネーターはその斜めの位置にいて、教員でもない、当然生徒でもないというところで、生徒とかかわりをしています。

主にどういう仕事をしているかという、先ほどから出てます地域との連携のいろんな活動、教育、そういったところで、学校の外へ出て、地域の方に学校に来ていただいたり、または生徒を地域のほうへ連れていったりしながら学びの場をつくっていくということで、単純に教員の補助ということではなくて、一人の教員と同じような、ある意味、生徒に対しては教育の場を提供するような活動していると、そういう存在ですが、非常に、先ほど浦野委員おっしゃったように、職業として成り立つぐらいの給料はなかなか出てないような状況があるというのが実態ではあります。

○教育監 今、高校では魅力化高校と呼ばれるところにはほぼ全て、町村の臨時職員になどというような形もありますし、国から派遣されてるとい、NPOの方もいらっしゃいます。いろんな形で入っておられます。職業として一つ確立しているというものではない。

○浦野委員 そうというのが職業として成立していくといいかなとすごく思ったんですけど、とても優秀な方がいらっしゃるんですよ。何かいろんな知識を持っていらっしゃる方がいらっしゃって、海外の経験もあられたりとか、何より子どもたちがすごく慕ってるので、そこで私はすごく驚いて、うまく地域の方と子どもたちをつないだり、学校とつないだり。

○溝口知事 いいことですね。

○浦野委員 いろんな手足が出ているというようなイメージですね。

○教育監 以前は、教員が地域の連携をしなきゃいけなかったですから、その分の仕事はかなり負担になってたんですけども、その分も担っていただける。

○溝口知事 担っていただいて。これは、いいことじゃないですか。

○新田教育長 今、県内でもいろいろな方法でコーディネーターを確保してるわけですが、例えば地域おこし協力隊で若い人が入ってきます。ああいう方にコーディネーターを頼ん

でいるケースもありますし、それから、地方創生の今、交付金が出ますので、あれを財源にしたり、過疎債のソフト事業で充当したりというふうなことで、それぞれやはり地域地域で地域課題なり、学校と地域のかかわりをどう持つかってというのは一律じゃありませんので、その辺はやはり各学校の学校長と地域のそういった方の間の橋渡しで、どういう人がいいかっていうふうなところで、それぞれの地域が工夫しておられる。それを県教育委員会として支援しているというふうな。

○溝口知事 そういう方は、正規の教員にその次はなる人が多いんですか。

○新田教育長 いや、そうとも限りません。

○教育監 1人おられたかな。

○溝口知事 そう多くないんですが。

○教育監 ほとんどいらっしゃらないです。それは経験として、あるいはもっと広い、何ていいますか、地域おこしをその先やってみたいとか、

○溝口知事 必ずしも先生になる、それとは違うわけですか。

○教育監 それとは違います。

○浦野委員 やっぱり視点がちょっと違うので、またそれはそれで子どもたちにとって魅力的な存在ということなんですよね。

○溝口知事 いいあれになるんでしょうね。

○浦野委員 実際お会いしたら、私もびっくりしたんですけれども。

○教育監 そんなに他県にはないですよ、このシステムというか、コーディネーターを入れてっていう。昨年度、埼玉県と協定を結んで、お互いのいいところを勉強し合おうと。やっぱり埼玉県さんが島根県の取り組みの中で一番興味を持っていらっしゃるのは高校の魅力化、そこでのコーディネーターの活用と、そういうことに非常に興味を持っていらっしゃいました。

○出雲委員 昨年、UIターンフェアしまね、東京会場に参加させていただいたんですが、そこでコーディネーターの仕事を島根県でやりたいという埼玉県の小学校教員の方が来られました。益田市が市内の学校に何人かコーディネーターを配置してるのですが、ぜひとも益田に来たいとおっしゃって、この4月から益田に来られると聞きました。

○教育監 割と全国的に注目していただいている、島根らしいという、思っているところではないか。

○出雲委員 今後、需要の可能性が広がる仕事ではないかと思います。

○溝口知事 いい経験になるんでしょうね。

○浦野委員 地位といいますか、上がってほしいな。

○出雲委員 これからそういう職種ができてくるのかもしれませんが。

○浦野委員 できて行ってほしいなど、島根から発信してもいいのかなというふうに思いました。

○教育監 そういう人材を養成するようなやっぱり講座とか大学の教育システムなんかは、まだまだできていないと。先ほど働き方改革という観点でちょっとお話をいただいていますけども、先ほどコーディネーター、それから業務アシスタント、結局、教員の膨らみ過ぎた仕事を代替してくれる人が要するというのがやっぱり妙薬だというような流れになってますけども、私も現場にいた人間なので、そのとおりでと思うんですが、それ以外のところでも、質を高めるために、教員の過重になり過ぎた負担というのを軽減することが必要だと思うんですけど、ほかに何か。検討委員会なんかでも議論はされているんですけども、委員の皆さん方で何か御提案といいますか、知事に知っておいていただきたいというような、そういうことが何かありませんでしょうか。

先生方自身の意識も変える必要があるような感じもしますけれども、真田先生、ないですかね。

○真田委員 どうしても学校は閉鎖的なというか、なかなか開くことが難しい。先ほど言われたような、地域の方々にやっぱり学校に来ていただいたりとかして、いろいろやってみるといいんじゃないかなという気はするんですけど、なかなかそこまで教員の意識が行かないのが難しいところかなと。特に高校なんかはどっちかいうと、教員が、進んでいるところもたくさんあるんですけど、チョークと黒板というのが生命線でやっぱりやっていますので、いろいろ任せたりとかいうようなことができなくて、教材も自分なりのものをつくったりして、どうしてもやってしまいますので、なかなかちょっと難しいところがある。本当に教員の意識を変えていかなきゃいけないなど。

前にいた学校は校内LANをつけていただいたので、各教科ごとにホルダーをつくって、そこに電子データで教材を入れていただいて、変な話だけど使い回し、ゼロからつくらなくても、前やられた方をちょっと自分なりにと言うんですけど、なかなかそれが先生方はできなくて、苦心したことを思い出します。自分なりのものをつくりたいというところがあって、そういうものとか、学校内のことは頑張るんだけども、一步出たら、地域との連携を何でそこまでしなきゃいけないんだという意識がちょっと強いんです。今言われた

ように、意識を少しずつ変えて、教員のほうも変わっていかないといけないんじゃないかなという気はしています。

○教育監 餅は餅屋といいますか、いい意味でも悪い意味でも、職人かたぎ的などこもちょっとありますので、教員には。そういう御指摘ではなかったかと思えますけど。

○溝口知事 学級は今、何人ぐらいなんですか、一般的な生徒の数は。

○教育監 高等学校は40人ですね。小・中学校については、国の基準では40人なんですけど、島根県は独自の少人数学級で、小学校3年生から上は全て35人。

○溝口知事 35人なんですね。

○教育監 はい、小1・2は30人。これは国の基準より5人ずつ少ない少人数学級を。

○溝口知事 それは合理的ですね。

○教育監 はい、これは非常に現場からは感謝されてます。現場から逆に、島根県、財政的にしんどいから、どっかで外されるんじゃないかという、そういうことは思っておりませんけども。

○藤田委員 いや、本当に現場からは、今の島根の独自の子どもたちの学級数は非常に喜ばれていまして、ちょうど向き合うのに一番いい人数でもありますし。

○溝口知事 そうですね。

○藤田委員 はい、これはぜひ本当にこのまま続けていって。特に中山間地域とか、隠岐とか、子どもの人口数が少ないところは非常にありがたいと思っておりますので、これも島根らしい、島根独自の教育方法だと思っておりますね。

○教育監 浦野委員、どうですか。

○浦野委員 一つ、これは働き方改革とつながるかどうかなんですけれども、今3学期制で、島根県やっていますけど、これを2学期制にというのはどうなのかなという。

○溝口知事 2学期。

○浦野委員 2学期制にし、前期・後期で。私、随分前なんですけれども、ボストンで日本人学校ありまして、そこに勤めてたことがありましたけれども、そのときにちょうど3学期制から2学期制に変えたんですね。通知表から何からを全部変える作業を1から携わってやったんですけれども、やっぱりそういう補習校でしたので、そんなに、週1回のペースでしか子どもたちに会わないので、それを1学期、2学期、3学期3つに分けて、何回かの分を年評価するのが結構大変だったんですね。それもあって2学期制にしたんですけれども、よかったです。よかったですというか、作業としては3回評価していたのが1

つ減るという形になって、子どもたちにも一つのスパンが長いので、夏休みを挟んで、そこで深めて、家庭学習なんかで補って、また次、まだ学期が終わらないうちに学習のまとめができるみたいな形にもなりましたし、何かよかったなというふうに思ってるんですが、何県か2学期制を取り入れている県はあるみたいですが、まだなかなか進んではないのかなと思います。

○溝口知事 大体4月から7月ぐらいまでですね。

○教育監 そうですね、1学期が4から7、9から12が2学期ですけど、前期・後期になる場合は、9月の終わりで前期が終わるとというのが一般的ですね。島根県でも宍道高校なんかは前後期制でやっていますし、邇摩高校もですし、幾つかはあるんですけど、今、部活の大会日程とか、あれはもう3学期制を前提に既につくられていて、そういうものとの兼ね合いをどうするかという、そこら辺で全国的にもなかなか踏み込めない。全国が一斉にガラガラポンで変われば幾らでもできると思うんですけど、なかなかそれは難しいですね。

○溝口知事 夏は暑いから休みって大体なっているわけでしょう。

○教育監 そうですね。試験も前後期にすると、進学校なんかでは、じゃあ、定期試験少なくすると範囲がどっと増えるので、そのたびにまた、その中の中間をつくるとか、そういうことを私立なんかではやってらっしゃいますし、なかなか、楽になる部分もあるし、楽にならない部分もあるという、そういう実態はあります。

ただ、いわゆる定時制、通信制などは、そういった全日制の全国のスケジュールからは違うスケジュールで動いていますので、そういうことができるという。ただ今後、多分、何月に入学するかということも今議論されているところもありますし、今後議論される可能性は十分にある。

○溝口知事 ありますか。

○教育監 はい。もう大分時間が来ました。知事のコメントをいただく前に何か、先ほどのようなことでもいいです、今後のことでも結構ですし、ちょっとこれ、言い落としたという部分も恐らくおありではないかと思えますけども、何か。

○出雲委員 昨年、県に幼児教育センターが開設されました。保育園、幼稚園の先生方の研修や支援に期待しています。これは、保育園、幼稚園の先生方の教育の質の向上や働き方改革にもつながっていくのではないかと考えています。幼児教育センターと従来の教育センターが連携して子どもたち、先生方をサポートしていただけることに期待しているところ

です。

○教育監 新たな組織なんですけれども、今年度の初めのところから幼児教育センターと
いうのを教育委員会内に組織しております。

幼児教育センター、今、具体的にどういうことを始めているか。

○溝口知事 全部そうなっているんですか。また違うんですか。

○濱村地域教育推進室長 出雲と浜田教育事務所に、それぞれ幼児教育の専任の担当の指
導主事を1名ずつ、それから幼児教育アドバイザーを1名ずつ、元保育士のOBさんに活
躍いただいておりますが、といったところを配置しておりまして、そういった方は、これま
でなかなか、保育所ですと集合研修は出にくいようなところもありましたが、できるだけ
訪問して、その園のほうで研修したりとか、そういったところのニーズに応じておりま
して、研修機会も増えて、そういったところが幼児教育の質の向上につながっているの
ではないかなと考えております。

○教育監 箱物がどんと一つあるセンターではなくて、機能としてそういうことをスター
トした、緒についたばかりですけれども。

○溝口知事 だけど、主眼としては幼稚園にあるわけでしょう。

○濱村地域教育推進室長 健康福祉部と教育委員会が共管する形で、幼稚園も保育所も全
て対象にして実施しております。

○教育監 よろしいでしょうか。最後には幼保の分野からの御意見もありましたけれども、
時間も大体参ったようです。

各委員の皆様方から、本当にさまざまな角度、あるいはさまざまな分野における御発
言をいただきました。ほぼ予定した時間が参りましたので、なかなか多岐にわたりました
ので、総括するというのも難しいかもしれませんが、御感想なりでも結構です。知事
サイドでコメントをいただけますでしょうか。

○溝口知事 今日お越しの皆さんなりの、島根県の教育について、御経験からいろんな提
言をされるということは、教育委員会にとりましてありがたいこととございます。やは
り父兄の方々が子どもたちの教育を一番よく知っておられるわけですからね。皆さん方
から教育委員会に対しまして、こうした面はどうなのかとか、あるいはこういうあれがで
きるのではないのかとか、そういう相互の意思疎通をぜひとも今後もおやりいただきま
して、現場の教職員、あるいは教育長等々、参考になりますから、こうした会合を定期的にお
やりになって、進捗してるものはそれでよしと。まだ足りない部分はこうしようとか、いろ

いろ御相談をしてるようになっていただくということは大切なんじゃないかなと思います。

私などは、もう現場のことは大分昔のことになりましたから、あんまりよくわかっているわけじゃありませんのでね。教育を担当されてる方々と御父兄の方々が意見交換をするということをお続けになられると、いろんな面で双方に役に立つんじゃないかと感じますので、それをぜひお願いいたします。

○教育監 ありがとうございます。

今日、意見交換していただいたさまざまな内容について、また今後も施設への反映あるいは検討を生かして、応援してまいりたいなと思っております。ありがとうございます。

それでは、以上をもちまして、私のほうで終わっていいですか。

平成30年度島根県総合教育会議を終了させていただきます。

○溝口知事 皆さん、忙しいところ、ありがとうございました。